

琉球大学学術リポジトリ

中学生の親子の進路コミュニケーションの類型化に関する研究

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-10-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 島袋, 恒男, 廣瀬, 等, 宮城, 安子, 大城, 琴恵 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2140

中学生の親子の進路コミュニケーションの 類型化に関する研究

島袋 恒男・廣瀬 等・宮城 安子・大城 琴恵
(教育心理学教室)

A STUDY ON THE COMMUNICATION STYLE ABOUT CAREER BETWEEN PARENTS AND JUNIOR HIGH SCHOOL STUDENTS.

Tsuneo SHIMABUKURO Hitoshi HIROSE Yasuko MIYAGI Kotoe OSHIRO
(EDUCATIONAL PSYCHOLOGY)

I. 背景と目的

子どもの進路意識や将来展望のあり方は、彼らの現在の行動、とりわけ学習行動のあり方に大きな影響を与えることが考えられる。中川(1980)は、進路意識に関係する子どもの目的意識を育てる条件として、①親子間での子どもの「将来に関する会話」の重要性をあげ、それが子どもの目的意識を発達させると指摘している。加えてそれを可能にする条件として、②仲間関係の中で子どもの心が他者に開かれていること、すなわち仲間の言動に感動できることが必要であると指摘している。また、淵上(1986)は高校生の進学意志決定に及ぼす対人的影響に関する研究の中で、高校生と母親の進路に関する会話の特徴を分析している。その結果、親子間の進学に関する会話は①進学などの目的を示さない「無目的」因子、②生徒の考えを尊重するような「自主性尊重」因子、③あまり話さない「会話なし」因子、④母親の願望を主とする「母親の願望」因子の4つに分類している。そして、母親との会話のスタイルが生徒の進学志望動機の形成に関与していると指摘している。これらの結果から親子間での進路に関するコミュニケーション・スタイルのあり方が、子どものポジティブな未来イメージを形成し、進路意識や目的意識を発達させる主要な要因になっていることが推察される。

ところで、島袋ら(1995a)は沖縄県の小学生を対象に進路成熟態度とCAMI尺度による

学習統制感、その手段保有感そして学習における手段-目的関係の認識(以下:手段の認知)との関係を検討した。CAMI尺度は最初因子分析にかけられた。その結果、①自分ができないこと的能力・運帰属、②友達ができること・できないことの教師・運帰属、③自分ができること的能力帰属、④自分ができること的能力帰属と統制感、⑤友達ができること・できないことの未知の原因帰属、⑥自分の手段(教師)の保有感、⑦友達ができないことの内的帰属、⑧友達がどきることの能力帰属、⑨自分の手段(努力、能力、教師)の非保有感の9個の因子が明らかにされた。その特徴として、学習達成に関して自分の場合(手段保有感)でも、友達の場合(手段の認知)でも「運」による説明が強く、「努力」による説明が相対的に弱いことがうかがえた。また同時に、子どもの目的意識に関係している教育的進路成熟態度(ECM)と職業的進路成熟態度(OCM)の因子分析の結果、ECMでは教育的進路計画度、教育的進路関心度、教育的進路依存度、教育的進路自律度の4因子が、OCMでは職業的進路自律度、職業的進路関心度、職業的進路計画度、職業的進路責任度の4因子が抽出された。CAMI尺度のポジティブな因子と進路成熟態度の各因子の間には、弱いながらもそれ相当の相関が見られ、特に両者の「関心度」はCAMI尺度と高い相関が見られていた。つまり、小学生の段階において進路成熟のあり方が、少なからず学習に関する認識や意識を方向づけていた。

また、島袋ら(1995b)はCAMI尺度の3側面の関係を、「手段の認識→手段の保有感→学習の統制感」の流れにおける相関関係のあり方を検討した。その結果、手段の認識「運」が手段保有感の「能力と運の保有感」と「能力と運の非保有感」と高い相関を示し、さらに両者はそれぞれ「達成への統制感」と「達成への無力感」と比較的高い相関を示していた。同様の結果は中学生、高校生においても確認されている(島袋ら, 1996a)。このような結果は、沖縄県の児童・生徒には、学習の成果に関して「運」による説明が相対的に強い可能性をうかがわせている。そのことは、学習や進路に関する親子間のコミュニケーションの観点から見れば、子どもの学習行動やその成果に関して適切なフィードバック(社会的強化)の弱いことを予測させ、親子間の進路や学習のコミュニケーションのあり方に問題が潜んでいることをうかがわせている。というのは、LOC理論(Rotter, 1966)から見れば子どもの学習行動やその成果に適切な社会的強化があれば、子どもは「努力」や「能力」などの内的要因で自己の行動やその成果を説明すると考えられるからである。また、そのことは生得的能力観や固定的能力観が一般的に存在することをうかがわせている。

沖縄県の児童・生徒において親子間の進路や学習に関するコミュニケーションのあり方に問題の潜んでいることは、沖縄県教育委員会の「保護者の家庭教育等に関する意識・実態調査」(1992)と「児童生徒の生活意識と実態に関する調査」(1992)の進路に関する結果に表れている。上の調査の中の「子どもの進路決定」の結果によると、保護者は子どもの進路決定の基準として、「子ども自身の考えで」(86.7%)を圧倒的に重視しており、「親の考えで」(22.2%)、「教師の意見」(18.8%)をそれほど重視していない。一見すると子どもの自主性を尊重しているかのように見える。しかし、その結果は子どもの側の「将来の職業選択」の基準に関する結果と斉合性がないと言える。すなわち、子どもの側は「将来の職業選択」の基準として、「自分の性格に合う」こと(57.5%)と「能力を生かせる」こと(56.2%)を挙げているが、それに関連して同時に「自分の性格」のイメージとして相対的に「短気」(38.6%)、

「集中力がない」(36.8%)、「何事も長続きしない」(36.8%)という特徴を挙げている。そのような性格に合う職業は現実的には少ないと考えられることから、一部の児童・生徒とその保護者には進路意識(進路観)や進路・学習に関する親子のコミュニケーションのあり方に問題を抱えていることが予測される。

本研究は上述の問題意識を踏まえて、沖縄県の高校受験を控えている中学生の保護者を対象とした親子の進路に関する会話・コミュニケーションの特徴を捉えることを第1の目的としている。先に指摘した問題点と関係してどのような進路コミュニケーションの特徴を指摘できるだろうか。そして、そのコミュニケーション・スタイルと進路達成における「手段の認識」のあり方の関係を探ることを第2の目的とする。さらに、進路コミュニケーション・スタイルに関わる要因として、親の「子どもの希望進路達成の見通し」の有無と子どもの学年による差異を検討する。

II. 方法と手続き

1. 調査対象者：沖縄県都市部郊外のN中学校の1年生から3年生の保護者403名が本研究の調査対象者である。その大部分は母親である。
2. 調査尺度：淵上(1986)の高校生用の進路・勉学に関する「母親との会話」に関する質問紙を保護者向けに修正して使用した。淵上(1986)の高校生の因子分析の結果では、「無目的」、「自主性尊重」、「会話なし」、「母親の願望」の4因子が確認されている。今回は「はい」、「いいえ」の2件法で回答させた。それに加えて、保護者の進路観を査定するものとして、進路CAMI尺度(島袋ら, 1996a)の中の進路達成における手段(努力, 能力, 運, 他者の援助, 未知の原因)の認識尺度20項目を用いて4件法で回答させた。上記2つの調査尺度に子どもの「希望進路達成の見通し」の有無の項目とデモグラフィック要因加えて「保護者の子どもの進路観と会話に関する調査」票を作成した。

3. 調査年月と調査の手続き：調査は1996年7月に実施された。各学級懇談会を使用して、学級担任の説明のもと回答させ、回収した。

4. 結果の分析方法：進路コミュニケーション・スタイルの結果は、数量化3類を用いて分析し、4つの進路コミュニケーション・スタイルを明らかにした。そして、4つの進路コミュニケーション・スタイルの得点に関して、親の「希望進路達成の見通し」の有無と子どもの学年の2要因の分散分析を行った。また、4つの進路コミュニケーション・スタイルの得点と進路達成における手段の認識の各帰属要因得点との相関係数が算出された。

Ⅲ. 結果と考察

1. 進路に関する親子の進路コミュニケーションの構造

進路に関する親子のコミュニケーションについて

の27項目を、数量化3類で分析したところ、統計学的に意味のある解（軸）が4個抽出された。4個の解で全体の39.9%の分散が説明されている。

第1軸は、Q1「私は将来高校・大学でどのような専門的知識が学べるか子どもとよく話し合う」、Q4「私は子どもと勉強時間のあり方についてよく話し合う」、Q12「私は子どもに受験にとって基礎学力が大事だとよく言う」、Q14「子どもの将来の就職についてよく話し合う」、Q16「子どもと学校の成績についてよく話し合う」、Q20「子どもと将来どこの高校・大学に行きたいかよく話し合う」という進学・就職・勉学を中心とした質問項目群の「はい」という肯定的反応に正の係数が、逆に「いいえ」という否定的反応に高い負の負荷が見られる軸である。よって、第1軸を『進路への関心・対話』の軸と命名した。図1にその結果を示したが、どちらかと言うと「いいえ」の負荷量が多い。逆説的に言えばこの得点が高くてはそれほど強い関心・会話とは言い難い結果になっている。

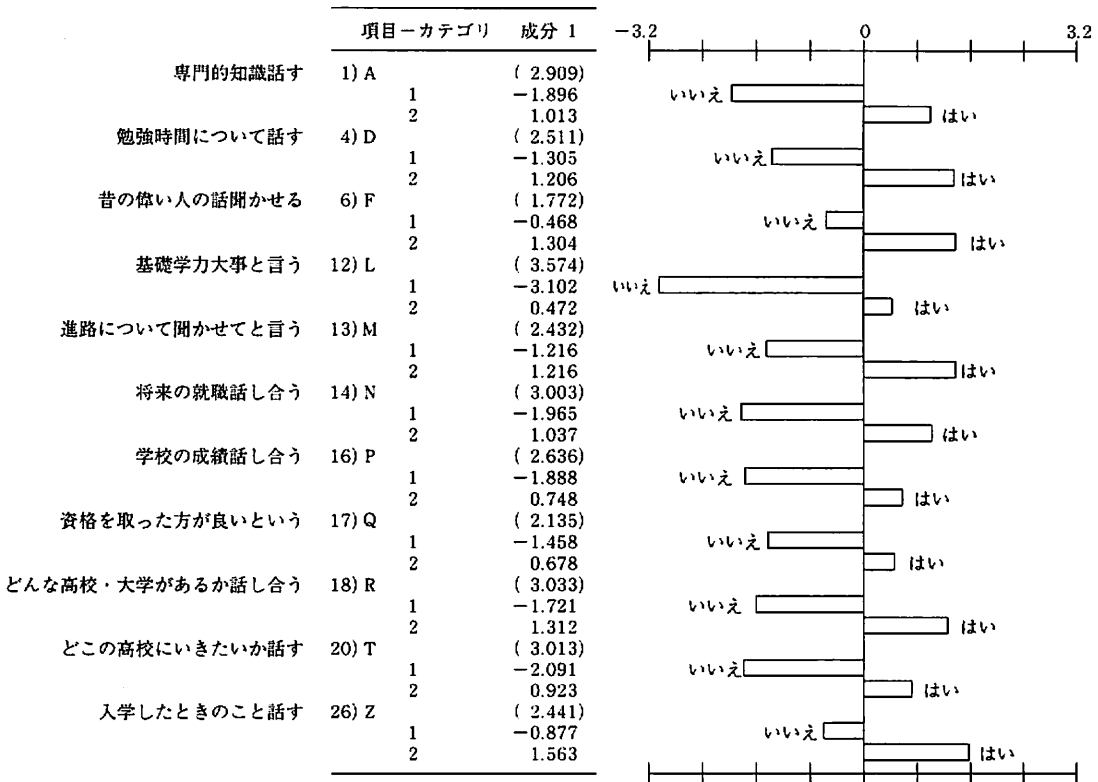


図1 第1軸「進路への関心・対話」

次に第2軸の結果を表したのが図2である。第2軸は、Q1「私は将来高校・大学でどのような専門的知識が学べるか子どもとよく話し合う」の「いいえ」に正の係数が見られ、逆にQ2「進路や勉強について聞いても子どもは答えてくれない」、Q3「家族を養うため高校・大学に行った方がよいとよく言う」、Q10「私は子どもとあまり進路について話し合わない」、Q22「高校・大学を出ていい仕事に就きなさいとよく言う」、Q23「子どもに進路や勉強について、人の意見を尊重してもらいたいと思っている」、Q24「高校・大学くらい行かないと後悔するとよく言う」の肯定的反応(はい)に正の係数が、否定的反応に強い負の係数が見られる軸である。明らかに、子どもとの進路や勉強の会話が成立せず、かつ「進学さえすれば」という親の気持ちが強く表れている軸である。しかし、進学や勉強に関する子どもの意見や気持ちに想いが行かず、高校・大学で何を学ぶかという視点はこの軸に含まれない。このような結果から、第2軸を「進路への会話な

し・親中心の願望」の軸と命名した。淵上(1986)の「無目的因子」と「母親の願望因子」がこの第2軸に関係していると考えられる。

第3軸(図3)は、Q5「子どもに自分の進路は自分で決めるようによく言う」、Q12「子どもに受験にとって基礎学力が大事だとよく言う」、Q15「子どもに自分の好きな高校・大学に行ってもよいとよく言う」という質問に対する否定的反応(いいえ)に高い負の係数が、肯定的反応(はい)に弱い正の係数が見られる軸である。また、Q25の「自分の力を見て進路を決めるようによく言う」の肯定・否定反応にも同様の正負の係数が見られている。全体的な印象として、進路選択にあたって、子どもの意見・立場を尊重するかどうかに関係していると言えることから、「子ども中心の進路の対話」の軸であると考えられ、淵上(1986)の「自主性尊重」に対応していると思われる。

最後の第4軸(図4)は、Q2「進路や勉強について聞いても子どもは応えてくれない」、Q10

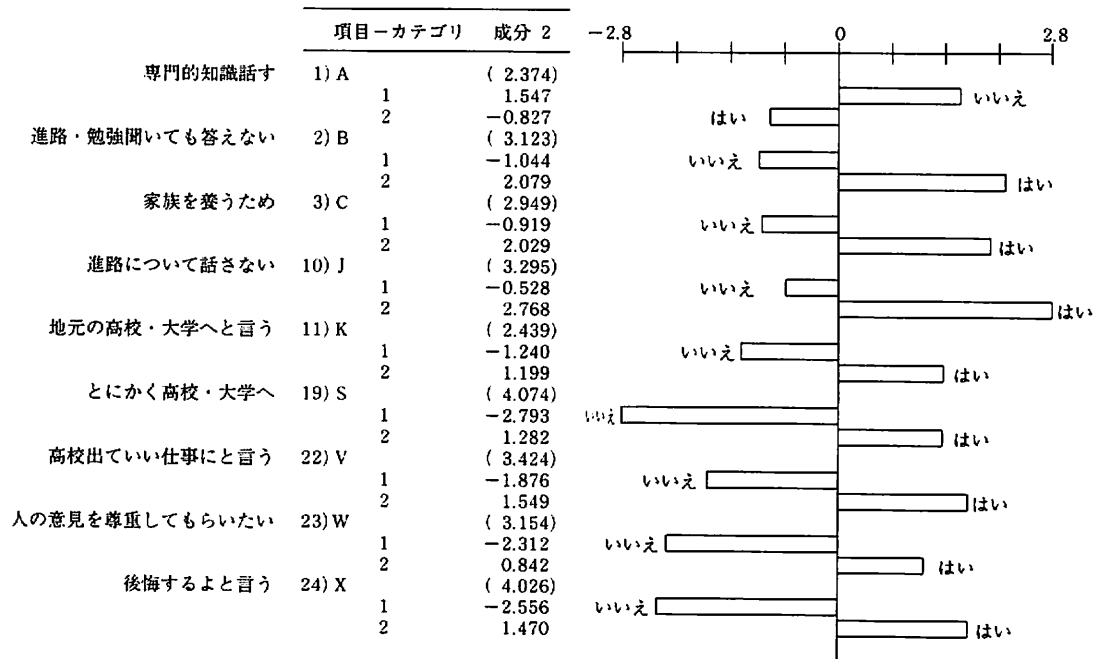


図2 第2軸「進路会話なし・親中心の願望」

「子どもとあまり進路について話し合わない」に対する肯定的反応と、Q5「子どもに自分の進路は自分で決めるようによく言う」に対する否定的反応の高い負の係数が見られている。明らかに負の方向は進路に関する会話が成立していないと言える。また、Q21「人にとって何が大切なことかについてよく話し合う」の否定的反応に高い正の係数が見られることから、進路以外の会話も成立していないと思われる。以上のことから、第4軸を「進路の対話なし」の軸と命名できる。

上で検討してきたように、中学生とその親の進路に関する会話は、「進路への関心・対話」、

「進路への会話なし・親中心の願望」、【子ども中心の進路の対話】、【進路の対話なし】の4つのタイプに分類できる。以下、上記の4軸についての親の個人得点を算出し、「子どもの進路達成への見通し」の有無と子どもの学年による親子の進路コミュニケーションの差異について検討していくことにする。

2. 親子の進路コミュニケーションの進路達成の見通しと学年による差異

表1-1は、「進路への関心・会話」の得点の「希望進路達成の見通し」と「子どもの学年」の

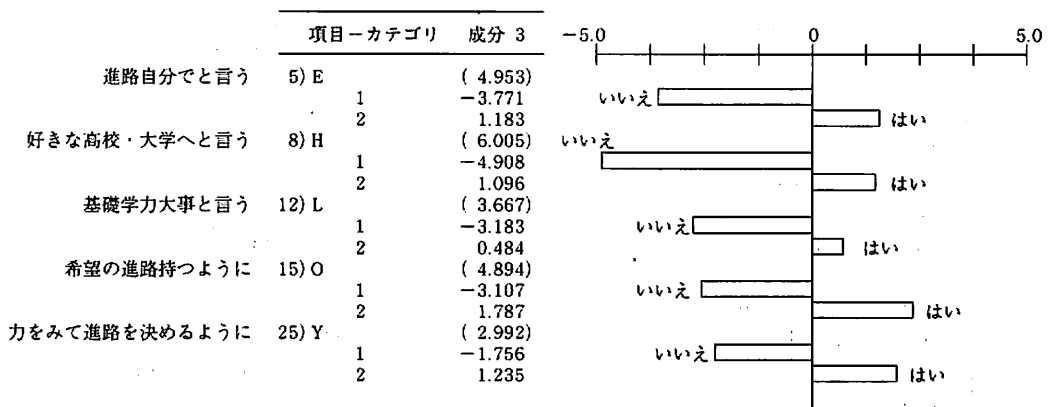


図3 第3軸「子ども中心の進路の対話」

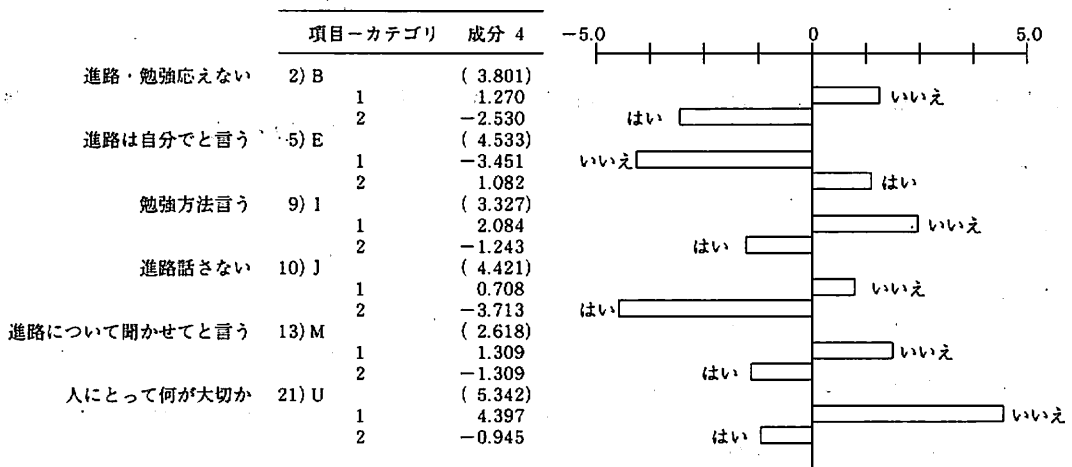


図4 第4軸「進路の対話なし」

2要因による平均値の差異を示している。それに基づく2要因の分散分析の結果を、表1-2に示した。その結果、「希望進路達成」の要因に主効果が、「学年」と「希望進路達成」の交互作用に主効果の傾向が認められた。つまり、親の「進路への関心・対話」の程度は、明らかに希望通りの進路を達成できると信じている親において高いことを示している。またその傾向は、一年生の親において著しいと言える。この結果は、早い段階の子どもの進路への見通しの有無が、親子の進路への関心・会話の程度を強く左右することを示唆している。

表1-1 「進路への関心・対話」の学年差と希望進路達成の差

	希望進路達成		平均
	いいえ	はい	
1年	-0.464 (1.05)	0.252 (0.88)	-0.001 (1.01)
2年	-0.184 (0.97)	-0.035 (1.07)	-0.096 (1.03)
3年	-0.148 (1.19)	0.190 (0.89)	0.078 (1.01)
平均	-0.289 (1.06)	0.151 (0.95)	

次に「進路の会話なし・親中心の願望」の得点の平均値を学年と「希望進路達成」の有無別に示したのが表1-3である。そして分散分析の結果を示したのが表1-4である。分散分析の結果、「進路の会話なし・親中心の願望」の強さには学年と、希望進路達成の有無の要因の主効果が見られている。明らかに、子どもは希望進路を達成できないと応えている親に「進路の会話なし・親中心の願望」が強いことが分かる。また、1年生の親に比較して2・3年生の親の得点の高いことを示している。親の子どもの勉強・進路に対する焦りが子どもの学年の進行とともに強くなるのであろうか。

表1-3 「進路への会話なし・親中心の願望」の学年差と希望進路達成の差

	希望進路達成		平均
	いいえ	はい	
1年	-0.048 (0.98)	-0.319 (1.01)	-0.223 (1.01)
2年	0.345 (0.88)	-0.107 (0.99)	-0.078 (0.97)
3年	0.048 (0.91)	0.086 (0.92)	0.073 (0.92)
平均	0.113 (0.94)	-0.143 (0.92)	

表1-2 「進路への関心・対話」の分散分析表

要因	SS	DF	MS	F	P
学年 A	0.999	2	0.497	0.51	ns
希望進路達成 B	15.151	1	15.151	15.53	0.001
A × B	5.044	2	2.522	2.58	0.10
誤差	336.542	345	0.975		

表1-4 「進路への会話なし・親中心の願望」の分散分析表

要因	SS	DF	MS	F	P
学年 A	7.420	2	3.710	3.99	0.05
希望進路達成 B	5.107	1	5.107	5.493	0.05
A × B	2.831	2	1.415	1.522	ns
誤差	320.798	345	0.930		

第3軸は「子ども中心の進路の対話」の軸であった。その得点の平均値を学年と希望進路達成の有無で比較したのが表1-5であり、その2要因での分散分析の結果を示したのが表1-6である。分散分析の結果には特に主効果の見られる要因はない。この軸は一見すると子どもの自主性を尊重しているかに見えるが、どちらからかと言うと進路における「子ども任せ」みたいな感があるかも知れない。すなわち、背景と目的で指摘した子どもの進路決定の基準として、「子ども自身の考え」を挙げた親の態度に関係していると思われる。また、沖縄県の児童・生徒の進路成熟態度を分析し

た島袋ら(1995a)によれば、児童や生徒の進路成熟態度において「親と教師への依存」という特徴を示すグループが存在することを指摘している。つまり、「子ども中心の進路の対話」は進路における子どもの「親と教師への依存」に対応する親の態度に関係していると推察される。学年差、希望進路達成の有無による差異が見られないのは、そのような親の態度が一般化していることを反映しているかも知れない。

最後の第4軸は「進路の対話なし」の軸であった。その得点の平均値を学年と進路達成への見通しの有無の2要因で示したのが、表1-7であり、

表1-5 「子ども中心の進路の対話」の学年差と希望進路達成の差

	希望進路達成		平均
	いいえ	はい	
1年	-0.036 (1.02)	-0.035 (0.90)	-0.036 (0.94)
2年	-0.103 (1.04)	-0.049 (1.01)	-0.013 (1.02)
3年	0.180 (1.16)	-0.014 (1.08)	0.050 (1.10)
平均	-0.008 (1.06)	-0.005 (0.98)	

表1-7 「進路への対話なし」の学年差と希望進路達成の差

	希望進路達成		平均
	いいえ	はい	
1年	-0.190 (0.97)	-0.033 (0.88)	-0.089 (0.92)
2年	0.165 (1.06)	0.308 (0.93)	0.250 (0.95)
3年	-0.361 (1.03)	0.045 (1.05)	-0.089 (0.95)
平均	-0.107 (1.01)	0.089 (0.95)	

表1-6 「子ども中心の進路の対話」の分散分析表

要因	SS	DF	MS	F	P
学年 A	0.425	2	0.212	0.207	ns
希望進路達成 B	0.000	1	0.000	0.000	ns
A × B	1.404	2	0.702	0.703	ns
誤差	354.776	345	1.028		

表1-8 「進路への対話なし」の分散分析表

要因	SS	DF	MS	F	P
学年 A	9.341	2	4.672	5.01	0.01
希望進路達成 B	3.804	1	3.804	4.080	0.05
A × B	0.998	2	0.499	0.536	ns
誤差	334.807	350	0.957		

その分散分析が表1-8である。その結果、学年の要因と進路希望達成の要因の主効果が認められた。つまり、学年別では2年生の親に「進路の対話なし」の得点が1、3年生の親に比べて高く、また明らかに子どもの「希望進路達成の見通し」のない親の得点が高いことが分かる。この結果から、1年生の親は未だ子どもの進路が現実味を帯びていないこと、3年生では進路が現実味を帯びているが、なかなか実際に進路の会話を持つ時間がなくなっていることを示唆している。しかし、「希望進路達成の見通し」を持つ親は子どもの進路への関心が強く、日常的に進路に関する会話を交わしているということになる。

3. 進路コミュニケーション・スタイルと親の「進路における手段の認識」の関係

2節で検討してきたように、親子の進路に関するコミュニケーション・スタイルは子どもの学年によって、また希望進路達成への見通しの有無によって差異が認められ、子どもの側の条件によって少なからず量的な変化が見られた。しかし、進路に関するコミュニケーションの質的な側面は、状況依存的であると見なすよりは、かなり固定的で安定したパターンであると思われる。それ故親子の進路コミュニケーション・スタイルを規定する要因を探る必要がある。ここでは先に述べた

進路親としての親の「進路達成における手段の認識」のあり方が親子の進路コミュニケーション・スタイルにどのように関係しているかについて検討する。

表2-1は全学年の親子の進路コミュニケーション・スタイルと進路達成における手段の認知の間の有意 ($p < .05$) な相関係数を示したものである。その結果によると「進路への関心・対話」の得点は、手段の認識「努力」と正の相関を示しているが高い相関とは言えない。手段の認識の各帰属要因と相関の見られるのは、「進路の会話なし・親中心の願望」の得点である。すなわち、「進路会話なし・親中心の願望」のコミュニケーション・スタイルの背後には、一般的に子どもの進路達成は「能力」や「運」で決まるという進路観があり、それと同時に「未知の原因」（進路達成の手段は分からない）の意識のあることが分かる。しかし、手段の認識の各帰属要因はその他の進路コミュニケーション・スタイルとは相関が見られていない。その理由として、数量化3類の結果による親子の進路コミュニケーション・スタイルは会話や関心に対する否定的反応によって特徴づけられ、肯定的反応の影響が少ないことが考えられる。換言すれば、その分だけ会話や関心の方向性が弱いと言えよう。

先に検討したように進路コミュニケーション・

表2-1 「親子の進路の会話」と「進路への手段の認識」の相関（全体）

進路の会話／手段の認知	努力	能力	運	人的援助	未知の原因
進路への関心・対話	.129				
進路会話なし・親中心の願望		.288	.308	.129	.288
子ども中心の進路の対話					
進路対話なし					

スタイルの得点は、子どもの学年差が見られた。そこで、親子の進路コミュニケーション・スタイルと進路達成への手段の認識の相関を、子どもの学年別に比較検討した。

表2-2は1年生の親の両者の相関係数を示している。1年生の親の結果は先の全体的結果と大差はないと言える。しかし、手段の認識「能力」や「運」は先の全体的結果にも増して、「進路への会話なし・親中心の願望」の得点とより高い相

関となっている。また、弱いながらも「進路への関心・対話」の得点は手段の認識「運」と負の相関になっている。

次に2年生の親の結果について検討する。表2-3によれば他の学年に比べて「進路会話なし・親中心の願望」と手段の認識「能力」, 「運」との相関は弱くなっている。多分に進路に関して、子どもも親も中だるみ現象があるのだろうか。

最後に高校受験を間近に控えた3年生の親の結

表2-2 「親子の進路の会話」と「進路への手段の認識」の相関（1年）

進路の会話／手段の認知	努力	能力	運	人的援助	未知の原因
進路への関心・対話	.160		-.153		
進路会話なし・親中心の願望		.425	.377	.251	.255
子ども中心の進路の対話			-.184		
進路対話なし					

表2-3 「親子の進路の会話」と「進路への手段の認識」の相関（2年）

進路の会話／手段の認知	努力	能力	運	人的援助	未知の原因
進路への関心・対話					
進路会話なし・親中心の願望		.165	.262		.251
子ども中心の進路の対話					
進路対話なし					

表2-4 「親子の進路の会話」と「進路への手段の認識」の相関（3年）

進路の会話／手段の認知	努力	能力	運	人的援助	未知の原因
進路への関心・対話	.170	.196	.211	.216	
進路会話なし・親中心の願望			.266	.203	.268
子ども中心の進路の対話					
進路対話なし					

果は1, 2年生の親のそれとは様相が異なっている。表2-4の結果から、「進路の会話なし・親中心の願望」は、手段の認識「運」, 「未知の原因」と正の相関を示しているが、手段の認識「能力」との相関が見られない。それに変わって手段の認識「人的援助」が正の相関を示している。この結果から、子どもが3年生になっても「運」頼みや、「未知の原因」に示される子どもの進路への無関心層は存在するが、それと同時に子どもの進路決定を教師に依存していくようになることがわわせている。

また、「進路への関心・対話」が他の学年とは異なり、手段の認識「能力」, 「運」, 「人的援助」と相関を示すようになっている。多分にこのコミュニケーション・スタイルのある親は子どもの能力に安心感を持ちながらも、運頼み、教師頼みの気持ちが強くなっていくであろう。

以上に比較検討してきたように、親の考える進路観（進路達成の手段の認知）は、「能力」, 「運」が親子の進路コミュニケーション（進路の会話なし・親中心の願望）をかなり規定していた。このような結果から、子どもと同じように物事の成功・失敗を「能力」や「運」で説明する考えが保護者でも存在すると言える。それに対して、手段の認識「努力」は親子の進路コミュニケーションをそれほど規定していないことが示された。こ

のような結果から、達成行動は生得的な能力や運次第であるという伝統的な能力観のあることが推察される。また、このことは進路達成や学習達成における現実的な多様な情報が少ないことをも予測させている。子どもの目的意識を育てる為には、進路達成、学習達成における現実的・実際的な情報を子どもや親に理解させていく試みが学校の進路指導において必要になっていくと考えられる。それによって子どもの将来のポジティブなイメージを形成していく手だてを工夫していくことが望まれる。

引用文献

- 沖縄県教育委員会 1992 保護者の家庭教育等に関する意識・実態報告書
- 沖縄県教育委員会 1992 児童生徒の生活意識と実態に関する調査報告書
- 廣瀬 等 島袋恒男ほか 1996 沖縄県の児童・生徒の学習の統制感と原因帰属に関する発達の研究（Ⅱ）—進路発達との関連で—琉球大学教育学部紀要 48, 405-416.
- 淵上克義 1986 進学意志決定に及ぼす対人的影響に関する研究 教育心理学研究 34, 4, 59-63.
- 中川作一 1980 小学生の目的意識を育てる条件 未来をひらく教育 60, 27-45.

Rotter, J.B. 1966 Generalized Expectancy for Internal and External Control of Reinforcement. *Psychological Monograph*. 80, 1. (Whole NO. 609)

島袋恒男 井上 厚ほか 1995 a 沖縄県の児童の進路発達と学習の原因帰属に関する研究－CAMIによる学習意識と進路成熟の関係－ 琉球大学教育学部紀要 46, 101－114.

島袋恒男 嘉数朝子ほか 1995 b 沖縄県の児童の学習意識・認識に関する研究－CAMIによる分析を通して－ 琉球大学教育学部紀要

47, 199－214.

島袋恒男 井上 厚ほか 1996 a 沖縄県の児童・生徒の学習統制感と原因帰属に関する発達的研究（Ⅱ） 琉球大学教育学部紀要 48, 387－404.

島袋恒男 廣瀬 等ほか 1996b 高校生の進路達成への統制感とその手段の保有感と認知に関する（Ⅰ）－進路CAMIの作成とその発達－ 琉球大学法文学部紀要「ヒューマンサイエンス」, 2, 69－88.